

## ネパール・トリブバン大学 CNAS との計量社会学セミナー 報告

2009 年 3 月 13 日 関西学院大学大学院社会学研究科大学院 GP 事務室

### ■ 1. 目的とスケジュール ■

以下のスケジュールで、ネパール連邦民主共和国において、トリブバン大学 Center for Nepal and Asian Study (以下、CNAS とする) と共同で計量社会学セミナーおよびネパール文化・社会情勢視察 (以下、スタディツアー) を開催した。

---

○ 出張目的：

トリブバン大学 CNAS と関西学院大学大学院 (以下、KG とする) 社会学研究科大学院 GP プログラムとの計量社会学セミナー、およびスタディツアーの実施。

○ 出張人員：

教職員：中野康人准教授 (セミナー講師)、小路谷美沙

院生・研究員：、中川和亮、濱田武士、福田雄、葛西映史子

○ 目的詳細：

主たる目的は、中野准教授による計量社会学セミナーの開催である。受講者は、英語で計量社会学の基礎を学び、かつ、統計処理ソフト「R」を使用することを通して、計量的な手法による社会学的分析を実習する。また、この共同セミナー開催前後にスタディツアーを行い、社会学的視点をもってネパールの文化や社会の現状を視察する。

○ スケジュール：

=3月4日 (水)=

・CX503 および CX6704 により関西空港からカトマンズへ。

宿泊：3月4日から3月10日までホテル・ヒマラヤ

=3月5日 (木)=

・トリブバン大学カルキ氏およびアユシュマ氏の案内で、スタディツアーを行う。首都カトマンズより車で1時間ほど移動し、ドゥリケル、バクタプールなど訪問。その後、夕食会およびセミナー打ち合わせ。

=3月6日 (金)=

・終日、カトマンズ市内にてスタディツアー。

=3月7日 (土)=

9:00-10:30 オープニングセレモニー (調印式およびセミナー開会式、日本大使館後援)

11:00-12:00 計量社会学セミナーI

14:00-16:00 計量社会学セミナーII

(於: ホテル・ヒマラヤ)

=3月8日(日)=

10:00-12:00 計量社会学セミナーIII

14:00-16:00 計量社会学セミナーIV

(於: ホテル・ヒマラヤ)

=3月9日(月)=

10:00-12:00 計量社会学セミナーIII

14:00-16:00 計量社会学セミナーIV

(於: ホテル・ヒマラヤ)

・駐ネパール大使(水野達夫氏)の招待により日本大使館にて夕食会。

=3月10日(火)=

・夕食会(於: ホテルヒマラヤ)。

・CX6705 および CX506 にてカトマンズから関西空港へ。

=3月11日(水)=

・14:40 関西空港到着。

---

## ■ 2. 関西学院大学・トリブバン大学 CNAS 計量社会学セミナー ■

初日の7日には、CNASにてオープニングセレモニーが開催された。これには、以前よりネパールの研究所やトリブバン大学のカルキ氏をはじめとする教授らと学術的交流のある古川彰教授をはじめ、セミナー参加者全員が出席した。古川教授が本セミナーの開催趣旨を説明したのち、CNAS 所長のアディカリ氏、CNASの関係者、水野達夫駐ネパール大使が挨拶し、KG社会学研究科大学院GPプログラムとCNASの学術的交流が今後一層強まっていくことへの期待が述べられた。

その後3日間にわたって、統計処理ソフトRの活用法を教授する計量社会学セミナーが開催された。ネパールの社会学および人類学の分野においては、質的調査が主流であり、計量社会学的手法を用いた調査研究は皆無であったともいえる。そのような状況において、今回のようなセミナーを開催することは、ネパールという国への学術的貢献でもあり、修士課程に在籍中の大学院生にとっても大きなチャンスを与えたといえるだろう。今後このプログラムは、2年間継続して開催されることが予定されており、相互の学問的交流が期待されている。

### ○ 統計セミナーの目的と内容

#### 【中野康人】

本セミナーの最終的な目標は、受講生が各自の研究関心に基づいて、計量社会学的な調査と分析を行うことにある。ただし今回は第一回目のセミナーであり、また参加者も修士課程初年度の大学院生を中心としていたので、計量社会学の理論と方法の基礎的な部分を確認すること、そしてその技法の一端を実際に体験して、実際の研究活動に使えることを実感してもらうことを当面の目標とした。

具体的内容は、(1)質的調査と量的調査の違いやその短所長所の確認、(2)問いのたて方と操作化の練習、(3)社会学的な統計分析の基礎(クロス表の作成、解釈、グラフ表現)、(4)Rの基本操作、(5)サンプルデータを利用した分析演習、(6)分析結果のプレゼンテーション、であった。演習形式で、それぞれ二時間ほどを費やした。

今回のセミナー参加者は、どちらかというと言質的研究をベースにしている者がほとんどであった。質的研究と量的研究の違いは、単に調査の方法や分析手法の違いだけでなく、実際にはそこに平行して存在するパラダイムや方向性の違いが大きい。事例の記述を指向するのか一般化したモデルを指向するのか、演繹なのか帰納なのか、などなどがその相違点である。技術的な内容に入る前に、研究のやり方の根本的な部分の確認に時間を費やした。現実社会と理論的な問いの間をつなぐ研究サイクルの中で、自らの調査がどの位置にあり何を指向しているのかを自覚すれば、調査や分析の手法が質であるか量であるかということはさほど重要なことではない。しかし、抽象的な理論レベルと具体的な現実レベルとの間で自分の研究関心を操作化するという作業は、はじめて経験するものにとっては理解が困難なところもあるようだった。たとえば、「ジェンダーと女性の攻撃的行動との関係を調べたい」というある参加者の問いについて、「ジェンダーの現状を国会における女性議員の比率で測る」という提案をしたら、「ジェンダーに関心があるのであって政治状況に関心があるのではない」という返事がかえってきた。この例にかぎらず、idiographicな思考から抜け出すのが、今回のセミナーの実質的課題の一つであった。

分析手法については、質的データを扱うことを想定して、カテゴリカルな変数の分析の基礎であるクロス表の分析とグラフ表現を重点的にあつかった。クロス表の解釈の仕方、残差による関連の解釈、モザイクグラフによる視覚化などが具体的トピックである。参考文献のファイルを事前に配布していたので、参加者がある程度の予備知識をもっている状態を想定していたが、停電の影響などでネパール側の参加者に参考文献がいきわたっておらず、白紙の状態から説明をしなければならなかった。かなり急ぎ足の説明になってしまったことは反省材料である。

実際の分析演習では、Rを利用した。CUIベースで、コマンドを打ち込んでいくタイプのソフトになれていない参加者にとっては、一文字間違えただけでもエラーが出るという状況は、非常にストレスのたまる作業だったようだ。しかし、実際にグラフを作成してそれを解釈したり、またデモとしてネパールの地図上に統計データを視覚化する作業をした際には、参加者の多くの関心をひき、今後の継続的な学習に弾みをつけられたと思う。

セミナー後に参加者に提出してもらった評価アンケートによれば、概ね、セミナーの目標は達成できたといえるだろう。難点をあげるとすれば、時間的制約が大きく、すべてが駆け足だったことである。少し内容を欲張り過ぎたのかもれない。しかし、自分で問いをたてて考える、そして自分でサンプルデータを分析して考察するという作業を通して、ある程度は自分の手で計量的な分析をすることを体験してもらえたことと思う。消化不良な部分は、今後のセミナーや各自の研究活動を通して、解消してもらえらるだろう。両大学の若手研究者の間に、質的な研究手法と量的な研究手法を調和させた、方法論的に多元的な研究が生まれてくることを期待したい。

## ○ セミナーの感想

### 【中川和晃】

統計についての知識が未熟であり、セミナー当日は自分が内容についていくことで精一杯だった。

しかしネパールの学生とペアを組んでの演習の際、各ペアでの発表内容などについて英語でやりとりしたことが大変刺激になった。統計を用いた研究への問題意識を高められたこと、国際交流の場を運営したこと、母国語ではない言語で議論したことが、私にとって大変有意義であった。今後積極的に国際交流の場に参加していきたいと感じた。

#### 【濱田武士】

このセミナーを通して私は英会話能力の必要性を痛感した。今回のセミナーは、ネパールと日本の大学院生が統計の学習を中心としつつ、交流するものだった。英語による講義は英語に慣れながら統計を学ぶという効果があったと思う。また参加者間では英語でそれぞれ自分の関心や研究内容を表現し報告を行った。本来なら統計の知識と英語の能力を持ち合わせることで、このような学術交流を円滑に進めることができるだろう。しかし実際のセミナーでは、統計の知識があまりないが英語を話せる学生と、統計の知識はあるが英語があまり話せない学生がいた。私がペアになったネパールの学生は前者で、私は後者だった。だから英会話能力の不足から、こちらから積極的に何かを相手に働きかけることはできなかった。ただ今回私は、セミナーに向けての事前の準備により統計の知識があったので統計の領域においては意思疎通ができたかと思う。しかしセミナー以外の場では交流することが難しいと感じるときがあり、英会話能力の必要性を感じた。このように振り返ってみると、こうした国際セミナーに参加させていただくことによって、今後、英語を学んでいこうという課題を発見することができたよい機会ともなったと思う。

セミナーでは現在まで質的調査しか行ってこなかったネパールの学生も、Rによる統計分析と量的調査の一般的知識を学習した。ただ今後それぞれの関心にRを取り入れた研究を行うためには、まだまだ統計の基礎的な知識が不足している。今回のセミナーはその点について学ぶ機会が少なかったと思う。よって今後の改善点は、Rによる統計分析をより効果的にするために、統計一般の領域とRを関連付けて考えていく必要がある。これにより学生はRをどう使えばよいかの課題が見えてくるだろう。また次回新たに参加する院生は事前に統計の知識を学んでセミナーに臨むことにより、Rによる統計分析の意義を今回よりもさらに理解することにつながるだろう。

#### 【福田雄】

セミナーの中で最も興味深かった点は、ネパールの院生とペアになり行った作業のなかで英語で思考しアウトプットしたことであった。セミナーの中では、数ある変数の中からいくつかを選び、仮説を立て、Rを用いて検証を行うというプロセスを全て英語で行った。特に英語で書かれている質問紙を理解し、言い換え、仮説を言葉にしてその良し悪しを議論することは、非常に骨の折れる作業であったが意義のあるものだった。特に「ある2変数の関係についてのこの問いがなぜ他の問いより社会的におもしろいのか」ということを説明するのに苦労したのを覚えている。私のパートナーは頭脳明晰ではっきりとものをいうタイプであったので、先ほどのような社会的問いに関する忌憚のない議論をすることができた。このような経験ができたことを嬉しく思う。

今後のセミナーの課題としては、Rによる統計手法について参加者をサポートできる人が、少なくともR未経験の参加者3人につき1人は必要だと感じた。必要なスキルとしては、簡単な英語能力、コンピュータリテラシー、Rの基礎知識である。私も仮説作成-モザイクプロットでの分析作業は初めてであり、その段になって自分のパートナー以外をサポートする余裕がなくなってしまった。次回以

降のセミナーでのサポートにどのような準備が必要なのかを今回わかったので次回以降生かしていきたい。

### 【葛西映吏子】

今回は、現地コーディネーターということで同行したが、院生とともにセミナーを受講させていた。こうした機会を与えていただき、私自身はこれまで質的調査を中心に行ってきたが、統計という手法を今後の調査研究に取り入れることを考えるきっかけとなった。

セミナーでは、最初から統計処理ソフト R の操作方法から入るのではなく、まずは現地の院生とともに「社会的問い」と「仮説」を立てる道筋を議論する時間を与えられた。問いと仮説はどのように実証されるのか、質的量的調査という枠組みを超えて、自らの問いを再考する有意義なプロセスであった。こうした段階を踏むことにより、ネパールという社会における社会的・人類学的調査・研究のあり方が見えてきた。ネパールでは、これらの分野では統計的資料を用いた調査研究が充実しているとは言えない。フィールドワークによる質的調査とは異なる方法でデータを扱うことによって、これまで漠然と抱いていた問いに対するアプローチ方法が見えてきたように思う。統計的資料が仮説の立て方や結論の導き方にどのように関係してくるのかを明確に指導していただき、日本人参加者を含めて今後の調査研究を進めていく指針を与えられたのではないだろうか。

今回は第一回目のセミナー、かつ参加者の多くが修士課程の院生であったこともあり、個々人の調査状況を報告し合ったり、データを持ち寄ったりすることはできなかった。今後このセミナーを継続していくなかで、互いの研究報告を交えて行っていくことができれば、より一層具体的で有意義なものとなるだろう。停電やデモ、祭日などが重なり、不便な点もあつが、これらもすべて含め、ネパールという社会を（否応なく）身近に感じてもらえたのではないかと、現地コーディネーターとしては満足もしている。ありがとうございました。

### 【小路谷美紗】

当初は約 2 時間のセッションを午前と午後 3 日間という余裕を持ったスケジュールと考えていたが、参加者の様子を観察していると、セミナーの内容が濃かったため、このスケジュールでついてゆくの精一杯という参加者も見受けられた。

関学の院生の中には英語がネックとなっている参加者がいたこと、同時にネパールの学生の中には PC の操作に不慣れであったり統計の知識がまったくない参加者がいたりしたため、個々人にチューターが必要な状況であった。関学の院生については、今後、英語の習得にいつそう力をいれていく、という決意の声がきかれ、ネパールの学生からは統計という彼らにとっては未知の領域の知識を自身の論文に取り入れたいという熱意がみられた。今後の彼らの研究人生に大きな影響を与えたことは疑いが無い。また、関学の院生とネパールの院生をペアにして作業や発表するよう指導したことから、セミナー中や昼食時に国際交流が盛んに行われ、日本やネパールの文化や情勢について互いの理解が深まったといえるだろう。

今後は、統計の知識があり、セミナーの進行を英語でサポートできる RA が参加すれば、より効率的に指導が行えるのではないだろうか。



<セミナーを終えた参加者一同 ヒマラヤホテルにて>

**セミナー参加者：**

<KG>

中野康人准教授（社会学部、セミナー講師）中川和亮、福田雄、濱田武士（社会学研究科 博士課程前期課程）、葛西映史子（社会学研究科・研究員）、小路谷美沙（大学院 GP 事務室）

<トリブバン大学>

Mrigendra BAHADUR Karki、AAYUSHMA K.C、Romas PRADHAN、Rishu SHRESTHA、Anshu SINGH Manav、Chakra BAHADUR Karki

<現地参加者>

Shovana BAJRACHARYA

<在ネパール日本大使館>

中川加奈子（専門調査員、関西学院大学社会学研究科・研究員）

### ■ 3. スタディツアーについて ■

セミナー前の2日間、3月5日と6日にわたってネパール・スタディツアーを行った。以下に院生3名からの報告文を掲載する。

1日目は、トリブバン大学から講師のカルキ氏とアユシュマ氏のガイドで、カトマンズ郊外にあるドゥリケルと世界遺産であるバクタプールを視察した。午前中、ドゥリケルではナモブッダという仏陀の前世を物語る寺院を訪れ、また午後には元々王宮であったバクタプールという古都を散策した。いずれも何百年も前からの街並や生活感が残る場所であった。それに加え、この時期が1年に一度の結婚式のシーズンやホーリー祭（悪魔の滅亡と人びとの繁栄を祝って水をかけ、色粉をつけあう）の時期と重なっていたため、ネパールの習俗や死生観、また宗教儀礼を実感することができた。また訪れた先での体験もさることながら、昼食時（ネパールは一日二食なので11時頃に早めの昼食をとる）や休憩の際に、ローカルの焼酎（ロキシー）を嗜みながら、その道程でのカルキ氏やアユシュマ氏との会話が大変興味深く有意義な経験であった。そこでは両国の研究課題や政治・文化について理解を深めあうことができた。特にこの初日にカーストや民族などについての知識を確認することができたことが後々に、セミナー中にディスカッションをするうえでも役立った。

2日目はカトマンズの市内を探索した。一番の繁華街であるタメルやネパール最古の仏教寺院スワヤンブナートなどを、極力タクシーを利用せずに一日かけて歩き回った。世界文化遺産のダルバール広場の喧騒や、物乞いする少年たち、執拗に話しかけてくる修行僧、ところかまわず行き交う車、バイク、牛など、郊外とは別種の熱気を感じることもできた。小さなストゥーパ（仏塔）のある広場の屋台でサモサとチャイを飲んでほっと一息ついた皆の様子が印象深かった。

2日間のスタディツアーを通して感じたことの一つはインフラ設備の不足である。幹線道路以外は未舗装で非常に埃っぽく、大気汚染がひどい。信号も少なく、クラクションを連発しながら、車が狭い道路を競うように走り抜けていく。交通渋滞はもちろんのこと、頻発するデモによる交通封鎖は毎度のことである。衛生環境は劣悪で、首都を流れる黒い川がそれを象徴している。乾季にあたるこの時期には、電気不足で1日6時間程度しか供給されず、水も人力で高架水槽まで汲み上げる。これが首都カトマンズの現状である。このようにネパールでは、日本の市街地では当たり前すぎない身の回りの環境に気づかされる。

ネパールにおいては空気のように存在するが、日本で暮らす我々には見えにくい生活の根幹部分にもふれることができた。それはカーストという階級職業制度であり、生活に密着した宗教制度である。たとえば、パシュパティナートというヒンドゥー教寺院で火葬を見た際には、その両方を感じさせられた。寺院に運び込まれる死体とそれに続く親族と思われる葬列、カーストにより異なる火葬場、目の前で焼かれていく死体を見つめる親族は、これまで目にしたことのない光景であった。テキパキと宗教儀礼を施しながら焼く職業は高位のカーストであり、一般的な人々の年収の何倍もの報酬をもらうという。死に対しての距離感や忌避感というものが日本人の感覚とかなり違うと感じた。死に対する感覚がどのような変数により説明することができるのか、興味が湧いた。こうした状況は、短期間の訪問では目に見えてきにくいネパールという国の現実ではあるが、今回は交流した学生たちが自らの生活を語ってくれたことによって、我々訪問する側にとっても切実なものとして感じるようになった。

---以上、本プログラムは、在ネパール日本大使館の後援を受け、開催した。